

大友氏顕彰フォーラム in 佐伯 報告書

○事業名 令和2年度 大友氏顕彰フォーラム in 佐伯 報告者：若杉孝宏

○趣 旨 大友氏家臣団は同族の「同紋衆」とその他の「他紋衆」からなり、他紋衆の大族、大神姓佐伯氏が大友氏にとって如何に重要だったかと同時に、江戸時代以前の佐伯の歴史と豊後における佐伯地方の存在意義を佐伯市民に知ってもらい、市民の誇りとアイデンティティとしてもらいたい。

○日 時 令和3年3月13日(土曜)13時00分～16時30分

○会 場 さいき城山桜ホール

今回の特徴はバックスクリーンの映像のすばらしさで、講師の佐藤巧氏は地元で有名な切り絵作家。彼が考察した文章に切り絵が挿絵としてあり、これをバックスクリーンに映し出した。このカット制作は合計100点にのぼり苦労したが、聴衆の目を楽しませることができた。

司会は顕彰会会員の藤田賢治氏。初めての経験とは思われない落ち着きをみせていて安心できた。また、オープン前に数分、佐伯氏の概略をスライド画面で説明、これは初の試みだった。



○オープニングは、顕彰会会員でもある原川二郎氏の歌謡で始まった。曲は「佐伯市歌」「男の港」「大友宗麟」の3曲。

○あいさつ／主催者・牧達夫顕彰会理事長、来賓は田中利明佐伯市長、宗岡功佐伯市教育長、柳信夫佐伯市老人クラブ連合会会长の3人で、代表して田中市長があいさつした。

牧理事長＝当フォーラムは大分市で10回、それ以外で4回開催してきた。今回は5回目、通算15回目となる。佐伯氏は大友家臣として常に重用された。本日は地元でもあまり知られていない中世の歴史＝佐伯氏を掘り下げて講演し討論する。自分の現職時代、佐伯時代の思い出に加え、会場施設のすばらしさを讃えて完成を祝した。



田中市長＝まずこのフォーラムが佐伯で開催することに感謝する。確かに佐伯市民の歴史知識は江戸時代が主であり、中世史はあまり知られていないし関心も薄い。佐伯市は九州内の各市では最大の面積を誇り、海の幸を始め自然の幸に恵まれている。本日は中世から古代までさかのぼって佐伯の成り立ちを掘り下げるということで大いに期待。また、毛利藩時代には教育に熱心で8代高標(たかすえ)公は四教堂(しこうどう)を設立、八万巻を所蔵する「佐伯文庫」も創設した。そのように教育文化面も進んでおり、これも佐伯市の誇りである。



◎基調講演／「大神姓佐伯氏について～その成り立ちから歴代当主を語る～」

講師／佐藤巧佐伯史談会会长



佐藤巧氏ご本人の切り絵をバックスクリーンに映し出し、その語り口と共に聴衆を魅了した。演題の通りに古代の佐伯の地の成り立ちから大神良臣が国司として豊後に赴任、それ以降の大神惟基から後の臼杵氏から佐伯氏が分かれ、緒方三郎惟栄亡き後、大神一族の棟梁となり、大友義鑑・義鎮時代に重臣として重きをなした。それゆえに義鑑時代に佐伯惟治が危険視され、謀反の疑いで滅ぼされた。が、遺された同族が優秀なため、佐伯氏の存続を認め、宗麟時代に12代佐伯惟教という素晴らしい重臣が存在した。

基調講演は主に佐伯氏10代惟治を「梅牟礼実録」を基に物語風に語った。

◎パネルディスカッション／「大友義鑑・宗麟時代の佐伯惟治・惟教・惟定はいかに生きたか」のテーマで討論した。



牧達夫理事長がコーディネートし、佐藤巧佐伯史談会会长、甲斐玄洋佐伯歴史資料館学芸員、若杉孝宏顕彰会副理事長をパネラーに討論が深まった。佐伯惟教は二階崩れの変で別府に滞在中の義鎮にいち早く知らせ、府内の町の混乱を鎮めた。義鎮から大きな信頼を勝ち得たが6年後、他紋衆の謀叛に加担したということで伊予に逃亡。それから13年後、大友対毛利戦を憂い帰参を願い出ると宗麟は大いに喜び許した後、加判衆にまで取り立てた。しかし8年後の日向合戦で討死にした。

その孫佐伯惟定は島津軍の攻撃に屈せず撃退。その働きは秀吉の激賞につながった。大友氏豊後守国後、藤堂高虎の上級家臣(五千石)となって佐伯氏は伊勢(三重県)で明治まで続いた。これらの事柄一つひとつに牧理事長のリードで討論が活発化し、会場からは納得する声が聞かれた。

次ぎに牧理事長自身の佐伯での体験をもとにゆかりの地を紹介した。最後に毛利藩8代高標公が子弟教育に熱心で「四教堂」を創設し、数多の教育者や文化人を輩出した。広瀬淡窓もそのうちの一人である。また蔵書が八万巻もあった「佐伯文庫」は全国的に有名である。

◎アトラクション／宇目神楽保存会

による勇壮な神楽を披露、若手が多く、その質は最高レベルと言えるものだった。

入場総数／220名（入場無料）。会場入り口でコロナ感染防止のため、消毒と検温をお願いし、念のために記名をお願いした。

評価／参加した大友氏顕彰会会員

三十数名は、今まで15回のうち最高だったとの感想が多かった。内容もさることながら、バックスクリーンに映し出された佐藤巧氏の切り絵のすばらしさがそういった感想につながったのではないかと思う。話だけではなく視覚に訴える重要性を改めて知ることとなった。毎回このような作品があることはなく、映像には今後の工夫が必要であることが課題として残った。また、休憩時間に挿間玉代さんの奈多夫人を歌った『悲運の愛』も映像を交え好評だった。

